「閏」一句鑑賞

守屋　明俊

（五十音順）

「異国の丘」ひがな身ぬちに開戦日　和田　郁子

この句の前に〈亡き母の小声の軍歌十二月〉がある。「今日も暮れゆく　異国の丘に　友よ辛かろ　切なかろ　我慢だ　待ってろ　嵐がすぎりゃ　帰る日も来る　春が来る」（増田幸治作詞、佐伯孝夫補作詞、吉田正作曲）。陸軍上等兵だった吉田正が部隊の士気を揚げるために作曲。戦後それがシベリア抑留の兵士の間で歌われ始め、昭和24年に発表された望郷の歌である。この歌を収録した『日本童謡集』で寺山修司は「人がひとつの唄をうたおうと思う衝動は、いつも個人の思い出と、歴史とのあいだで揺れ動いている」と述べる。掲出句の「ひがな身ぬちに」は、戦地や抑留地の誰彼と、日米開戦日以後の、敗戦日以降も続く惨い歴史に思いを馳せる。

春疾風掃けど掃けども綿ぼこり　阿部　草薫

春疾風は春の疾風であるけれども荒く、それは海岸の中空に舞う鳶を一枚のぺちゃんこの紙状にする程である。その風が運んできた沢山の埃が綿状の埃となり、それを作者は今掃いているが次々と綿ぼこりが出来て「掃けども」という言葉のとおり、いつまでも終らない。でもその風は木枯とは異なりあくまでも明るい。綿ぼこりを掃きながらも、作者は春の心地を楽しんでいる。

神が息フロントガラスに霜の花　伊澤やすゑ

自動車のフロントガラスに霜が降りて咲いたのである。朝それに気付き、これは自然現象であると。ただ、自然現象にしてもこの霜の花の美しさは並のものではない、きっと神様が息を吐いたのだろう。そう作者は想ったに違いない。上五に「神が息」と置き、読者に中七下五を興味深く読ませる句の構成が上手い。

風となり友よ従姉妹よ散る紅葉　市村　啓子

今年逝った友人や親しい従姉妹を「散る紅葉」で表現している。彼等の命ほどに真っ赤な紅葉。散るには惜しい紅葉。今や風となってその紅葉をやさしく包む。哀悼の一句。

兄の焼く自慢のジビエ太き葱　牛込はる子

ジビエは狩猟で食材として捕獲された野生の鳥獣（猟鳥獣）をいい、また、その肉料理をいう。猪、鹿、野兎、野鴨、渡り鳥など。日本でもジビエの人気が出てきている。この句では太き葱が焼肉に用いられている。ただ焼い

ただけでは硬くなるのでいろいろの工夫が要るようだ。例えばドイツでは、硬く臭みも強い鹿肉は、赤ワインかサワークリームに二三日漬けてからローストする。柔らかく臭みの少ないノロジカは、ワインに漬けず豚の脂身を差すだけで焼き、その途中でサワークリームをたっぷりかける。さて、「兄の焼く自慢のジビエ」の味や如何に。

十二月半端切手を組み合はす　内海　範子

昨年十月より郵便料金が大幅に値上げされた。今まで使用していた切手では料金不足になるので、差額分の切手を貼ることになるのだが、この句の作者は新しい切手を買わずに、手持ちの切手をうまく組み合わせて貼る。値上げ以前でも、在庫処分ではないが古い切手を二十枚くらい天地一杯に貼ったものを戴いたことが度々ある。それはそれで、色々の記念切手が見られ綺麗であった。十二月。この年末に作者はどのようなデザインの切手を選び、どのように並べて貼ったのだろう。

南中の日を爪先に冬麗　大下　壽櫻

座標が苦手で、天体が子午線を通過する現象であるところの南中が説明文を読んでも理解できない。が、かなり高いところから照る冬日であるらしいことは解かる。その麗らかな冬の日を爪先に受けたというこの句。外光を得て爪切りをしているのか、日向ぼこをしているのか、いずれにしても極めて穏やかな冬の一日を詠んでいる。「南中の日」であることによく気付かれた。

柿紅葉この一枚は神の色　太田　裕子

「神の色」としか言わないで、読者にそれはどんな色と想像させる巧みな句である。「この一枚」も強引。否応なしに読者を句に引きずり込む。それほどに、柿紅葉は魅力ある色を創造する。

人の和の証しとなるや菊人形　小野　直美

菊人形は英雄だけでなく、歴史上の悲劇の主人公なども菊を纏い私たちの前に立つ。その菊人形を囲みながらその生涯を語り合ったり、悲しみ合ったりしている内にこの句にある「人の和」が醸成されるのだろう。胸を熱くした人々の真ん中に菊人形が居る。その景が見える。

独楽にする木の実を拾ふ兄のゐて　金子かほる

兄を回顧した句。兄といえば木の実独楽なのだ。その拾う姿が兄なのだ。長い人生の中でのほんの一齣の場面。懐かしさと共に、兄妹がそれぞれ体験してきた戦中戦後の苦難の数々が作者の脳裡に浮かんでいる。この句からそのようなことも思った。

黄落や面影探す同窓会　金田　知子

久しぶりに開かれた同窓会。卒後何十年だろうから、会って「私です」と言われても、昔の面影とは異なる風貌や体形からその方を特定するのが困難な場合もある。向うも同じように感じているので、適当に相槌を打ちながら、なお昔の面影を探す。折しも黄落期。人生で言えば折り返し点を遥かに超えた頃であるが、それでも黄葉が照り輝き、まだ枯れはしない。頑張ってもらいたい。

憧れやりんごに歯型つけたころ　金田　喜子

林檎への憧れ。歯型を付けた頃への憧れ。この一句に憧れが一杯詰まっている。眼前の林檎を前にして、その幼い歯型を回想しその頃の自分を確かめている。内省的な句で、読む私も思わずその時代に引き込まれた。

冬晴や船旗の先の小豆島　北　好夫

雲一つない冬晴れの空の下、小豆島へ向かう船に作者が乗っている。そして、はためくその船旗の先にようやく小豆島が見えてきた。壺井栄の『二十四の瞳』の小豆島だ。逸る心が遠くの島を注視する。その小豆島への思いはこの揺れる船旗に象徴されている。作者の旅はまだ始まったばかりだ。〈遠くよりいろいろの音が聞こえてくる〉（壺井栄『海の音』より）。

毛糸編む交差の多い街ほどの　木山　有衣

編み棒を思った。先の尖った二本の棒で糸を操り、編み目を作る。私は縫い物も編み物も経験がないが、この句の「交差の多い街ほどの」は、その編み棒がスクランブルするところからの発想なのだろう。面白い比喩だ。双方、賑やかこの上ない。楽し気な一句。

ひげ吹いて木枯の鳴る鼻の穴　久保田勝一

木枯の季語をこんなところに使うかと思った句。「ひげ」はどこのひげか、頬か、鼻の下か、顎か。その「ひげ」を経由して木枯が鼻の穴を使い音を奏でる。作者は尺八が好きなようであるし、木枯の鳴らす音が尺八の音色をしていても可笑しくはない。鼻の穴も使う虚無僧。

兜太句に似てややこしや杜鵑草　栗原　季星

作者は金子兜太と同じ秩父に育ち、兜太の句を愛誦している。故にこの「ややこしや」は悪い意味で言っているのではない。一読で理解しがたい独特のものを持っているということなのだろう。そしてそれは杜鵑草と似ていると。杜鵑草は、花の斑点が鳥のホトトギスの胸の紋様と類似しているところからその名がつけられた。英国ではその花からの連想で「ヒキガエル」の名がつく。兜太の句とヒキガエル。得体が知れぬということか。

和花洋花暮をデザインする花屋　小圷あゆみ

暮れの花屋を覗くと、万両、千両、南天の実、葉牡丹、正月用の松などのほか、ポインセチア、シクラメンも見ることができる。和花洋花とはこのことを言っているのだろう。この句では「暮をデザインする」の一言が断然光っていて、新たな年を迎えるに相応しい賑やかで活気のある町の様子を伝えている。

箸求む小春の輪島物産展　小泉まり子

石川県能登半島地震と奥能登豪雨により、輪島市や珠洲市などの被害が大きかった場所はまだ危険な状態で被災者の避難生活が続く。その輪島の物産展が開かれ、作者はそこで輪島塗の箸を買い求めたという。輪島箸は伝統漆工芸。深い光沢があり美しい。小春日がなんとも暖かく、能登の一日も早い復旧を待つ作者の心を照らす。

俳句で脳を鍛へる勤労感謝の日　幸喜美恵子

そうありたいと思える句だ。確かに句を推敲したり、句を鑑賞したりすると、何かが吹っ切れるというか、頭の中が整理されその結果、脳が活性化するのかも知れない。大いに結構なことである。でもそれでは余りにも実利すぎて面白くない。理想は、惚けていきながら面白い句がぽっと湧くこと。そのためにも脳は鍛えるべし。

矢切ねぎ野菊の墓の道辿る　小濱けえ子

矢切の渡しで有名な松戸市の矢切地区。そこの西蓮寺の境内に伊藤左千夫の「野菊の墓文学碑」がある。作者は小説『野菊の墓』の舞台となったこの地を訪れ、矢切ねぎを知ったのだろう。矢切ねぎは白い部分が長く、太く、強い甘みがある。焼いてよし、煮てよしのこの高級ねぎを買いつつ佐千夫を偲び、民子を偲ぶ。

行き先を明かさぬツアー薄原　小林ゆきお

いわゆるミステリーツアー。どこへ連れて行ってくれるかを愉しむ旅だ。料理でいうと「おまかせ」のコース。極めて受身の旅だが、それなりの面白さがありファンも多いと聞く。この句では、その「行き先を明かさぬツアー」をおちょくり、ツアーの行き先が薄原だと詠む。その諧謔に共鳴した。

よろづ屋にサクマドロップ雪蛍　小林　玲

ドロップ缶と雪蛍（綿虫）。蛍とドロップ缶から、野坂昭如の『火垂るの墓』が想起された。死んだ男の子の手にあったドロップ缶には4歳で衰弱死した四歳の妹の小さな骨片が入っていたという。たくさんの蛍が舞う場面もあった。雪蛍は蛍ではないが、蛍の字が作者をしてドロップ缶を招く。これは深読み。

コンビニからファックス送る文化の日　斉藤久美子

ファックスがいつまでも文化であって欲しい。ただ、デジタル大臣だった方が、いつまでファックスを使っているんだと「時代遅れ」のファックス使用を批難したことがあった。本当はファックスの方が直筆をそのまま送ることが出来るので便利なのだが、多くの方がメールで伝達を難なく済ませているし、ファックスは風前の灯だ。だからこそ、この句は貴重なのである。

短日や音声だけのフリーレジ　佐藤　和子

デジタル時代。スーパーのレジの精算はまことに味気なくなった。人件費や人不足、カスハラなどへの対処を考えてのことだろうが、店員を通さず、機械に購入品を置くだけで代金が解かりそこで自動的に支払いが出来るフリーレジ方式を採り始めている。コンビニやパン屋でも、目の前の店員が代金を受け取らず、目の前の機械に金を入れろと言う。そこに手があるのに金が手から手に渡されない。理不尽な世の中になった。掲出句はそのようなことを背景に作られている。短日の淋しいこと。

いくつかの峠こえたりななかまど　島　昌子

いくつかの峠を越える旅の風景。　朝夕の気温の差が広がり、ななかまどの赤い実と赤い葉がとても美しく感じられる。この句は人生を旅と捉え、幾つもの峠は勿論、人生の節目。この峠を越えた先にきっと幸せが待っている。「越えた長坂四十路坂」という歌が聞こえてきそうである。作者には自分を鼓舞する前向きな句が多い。この句もそうだ。ななかまどは現在の作者の姿であろう。

去年今年汚れ擦れし世界地図　嶋谷　宗泰

明るい今年ではない。世界中がどこかおかしくなって沢山の人が殺されもし、憎しみを伴なう偽情報が国内外を駆け巡る。この先どうなるのだろうという不安、憤りがこの「汚れ擦れし世界地図」の措辞に籠められている。世界地図即ち人間世界である。正月を美しく詠めと言われても無理な世の中になってしまった。

さう言へば八十路半ばや霧襖　清水　悠太

五里霧中。霧襖からこの言葉が浮かんだ。立ち込める霧に巻かれたように、この先どうしていいか解からない状態。そう言えば俺も八十路半ばになったんだなという感慨、無常観が一句を貫いている。「さう言へば」に飄々とした、自然体の作者が見える。

低空の一機突入秋夕焼　首藤　久枝

「低空の一機突入」は空爆を思わせて、どきっとした。

「米軍の戦闘機の飛行士と目が合い機銃掃射された」と言う方々を知っていたので、この句も始めはそうかと思った。でも実際は秋夕焼に一機が突っ込んだだけで、平和そのものの句。その飛行機は秋夕焼を見るために突入したわけでもないのだろうが、こう詠まれるとなにか羨ましく思える。

朝夕と仰ぐ秩父嶺葱畑　正田　和子

その人の住む土地によって仰ぐ山は異なるが、作者の眼前には毎日秩父の山々が見えるらしい。とても幸せなことだ。そして秩父嶺の前には豊かな葱畑が広がり、この遠近の景を朝に夕に眺めることが出来る。これもまた幸せ。この句はその幸せを「朝夕と仰ぐ」だけで表現し纏めている。これは一つの熟練の技である。

木曾谷や霧の中から陽が昇る　新海あぐり

伊那方面からは権兵衛峠という伊那谷と木曾谷を結ぶ国道を車で抜けていく。作者は佐久穂の人だから、別のルートで木曾福島を抜け奈良井宿まで行ったのだろう。木曾谷は立派な川もあり霧が出る。だからこの句の「霧の中から陽が昇る」はとても美しい風景だったと思われる。作品中の奈良井宿は、江戸末期の歌舞伎役者三代目中村仲蔵も幾度か通った宿場で、雑煮が名物だった。

「暮に来るよ」指をぴぴつと吸ひ殻に　杉渕真喜子

莨を吸っている人の仕草を描いている作品。俳句は人間を詠み、自分を詠み、兎に角その素材の幅は広い。この句では「また暮に来るから」と言いつつ、指で抓んでいる莨の先をちょんちょんと吸殻入れに落とす大人を詠んでいる。ちょんちょんでなく「ぴぴつと」という擬音が何だか新しく、これは確かに杉渕さんらしい表現だ。

冬隣ゆつくり回るオルゴオル　高橋　章子

秋から冬へ。能登半島地震のあった昨年も季節の巡りがとても早い感じの一年だった。これに対して掲出句のオルゴールは、秋を惜しむかにその奏でる音楽もゆったりとしている。因みに、ぼくの持っているオルゴールの音楽は「イマジン」。早いテンポだが、そこはオルゴール。次第にのろくなり、最後は突然止む。冬隣から長い冬へ。作者のオルゴールはまだ回っているだろうか。

初秋刀魚思ひ入れこそ味となり　髙橋満利子

亡き笹島正男さんが初秋刀魚を食べたいというので、上水句会の男衆だけで秋刀魚のありそうな飲み屋を当たったことがあった。その時はまだ入荷されてなく、期待は見事に裏切られた。次回は絶対に食べるぞと正男さんが思ったかどうかは知らないが、掲出句での初秋刀魚

への「思ひ入れ」はやはり秋刀魚好きでないと解からないような気がする。この思い入れがあってこそ初秋刀魚の味は味わいのある味となる。とても頷ける句である。

落葉焚じわじわ人の寄り来たる　高橋美智子

落葉焚きが始まった頃はそれを遠巻きにしていた人たちが、次第にその焚火に近づいてくる。寒いからということもあるが、火には人を寄せつける何かがある。この句ではそれを「じわじわ人の寄り来たる」と表している。臨場感のある句で、老若男女の着膨れの姿が想われた。

しぐるるや僧はあしだの石畳　竹森　美喜

この「あしだ」は雨天に使う高い二枚歯のついた下駄。その下駄を履いた僧が時雨の石畳を歩いていく。この句は調べが良い。しかも、僧が石畳を歩いているというような冗長な言葉を弄せず「僧はあしだの石畳」とのみ記し、余韻を深めている。年季の入った句である。

爽籟や平和賞受く被団協　田中　京

核兵器の非人道性を語り継ぎ、核兵器廃絶を訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞。その受賞を心から祝福している句である。「爽籟や」に新しい風を感ずる。

かりがねや青空書房は自動ドア　寺田　幸子

自動ドアがあるからといって、この青空書房が実際に在るわけではない。青空書房と作者が勝手に名付けた、雁の空だけがこの句にある。自動ドアは作者の心の扉。その気になればいつでも開き、その先の空には、渡ってきた憧れの雁が群れをなして飛んでいる。私の句の「虫喰ひ堂古書店」と双璧をなす青空書房。

山近く水急くところ冬木の芽　長井　敦子

「山近く水急くところ」は極めてざっくりした表現に見えるが、「その冬木の芽はどこに行ったら見えるの？」と問われたら、この返答はまことに要領を得ていて簡潔。言葉をぎゅうぎゅう詰め込んだ句をよく見掛けるけれど俳句は述べない文芸。文章ではないので起承転結は不要、句にオチを付けない。この句のゆとりを見習いたい。

末枯や使ふことなき置き薬　中嶋きよし

医療機関から処方され現在飲んでいる薬を言っているのではない。余り強くない胃薬などの家庭薬なのだろう。薬売りが置いていった古い薬箱の薬を想像する。作者もその家庭薬に助けられたこともあったろうに、今は家の代も変り、薬売りも来ず、薬の補充もなされていない。「末枯や」が時代と暮らしの変化を伝える。

霜日和するどきものに鳶の笛　中村　敬子

厳寒を迎え霜が一面に降りて白い。空は凍てつつ晴れ渡っている。それが霜日和。そしてその凍空を舞う鳶の声が鋭いと、耳を澄ました作者は詠む。「鋭い」ではなく「するどきものに」の婉曲な表現により、鳶の笛が一層鋭く響いて聞こえてくる。これも俳句的技法。

立冬や蟻は光をおんぶして　中村　東子

立冬なので冬の句。柔らかな冬日が差す中、まだ穴に入っていない蟻が「光をおんぶして」歩いているという。面白い。フラットである筈の光が、一個一個小さな形をして蟻たちの背に乗っているように見えるからだ。童話のようでもある。これから入る穴が暗すぎるので、光を貯えるためにせっせとその冬日を運んでいる。「おんぶ」の可愛らしい言葉からそう連想することも出来る。

鬱病人の瞳に秋の空憩ふ　中村　幹子

鬱を病んでいる人の瞳の中に秋の空が憩うという不思議な句である。瞳を介して、秋の空もその人も、双方憩っている。その人の瞳に秋の澄んだ空が漂っているのを発見しただけなのに、そう感じたのは凄い。秋の空にとってもそこは憩いの場。その人にとっても心の休まる秋の空。そう鑑賞したい一句。

冬の陽は遠慮無用に日々奥へ　野沢　慶子

冬日を詠む。只事で終っていないのは「遠慮無用に」の言葉。遠慮無しに陽が奥まで差し込むのだ。窓から横にすっと入り、台所の薬缶や壁を照らす。食卓の上の塵まで映し出される。新鮮な目が、このようなありふれた日常を再発見した。

繰り言もゆるしたまひし花野かな　野村　雅美

花野に心が救われたという句。繰り言は愚痴で、家庭では言えないようなことを花野でなら話すことが出来た作者。何やら花野が懺悔室に見えるけれども、美しい秋草の靡く花野には人を赦す大きな包容力があるのだろう。

柿盗られそれを見てゐる鬼瓦　橋本かをる

柿泥棒を鬼瓦が見ていて、その一部始終を作者が見ているという構図。結局、柿は取られっぱなしで、鬼瓦は泥棒にお仕置きをするでもなく、それを見ているだけ。でも、この句には、ゆったりとした時が流れていてメルヘンを感じさせるものがある。

痩せ馬のくつろいでゐる花野かな　橋本　恭子

花野には疲れた人とか、この句のような痩せ馬が似合うのかも知れない。健康そのものの人は花野に来て、只

美しいとか綺麗とかの言葉を発するだけ。でも、少し疵を負っている人は、しみじみと花野の隅々まで見て佇む。なので、この痩せ馬は人のようにも思えてくる。花野の句としては異色である。

日に透ける小さき魚や水の秋　長谷川菊男

文字通り透明感のある句。小さな命にまで目を注ぐのが作者の句の持ち味で、この句も小さな魚、それも日に透けるような魚を詠む。「秋の水」でなく「水の秋」と置いたことで句に広がりと瑞々しさが出た。

残り柿そりやあ美味かろカラス二羽　長谷部幸子

「そりやあ美味かろ」の口語が何ともユーモラス。残り柿は、鳥たちのために残しておいた柿のことだろう。木守柿では「そりやあ美味かろ」に対し句が硬くなるので、敢えて「残り柿」としたのか。兎に角、この鴉二羽は美味しく柿を啄んでいて、その情景は鮮明だ。

忘れん坊みなのセーター編みし君が　畠山　奈於

「忘れん坊」は認知を発症した友人のことを言っているのだろうと、この中七下五の「みなのセーター編みし君が」から思った。そうだとしたら、この「忘れん坊」はなんて思い遣りのある言葉であろうか。その一言。

河鹿園時雨心地の番傘よ　浜田　優子

昨年十一月十六日の御岳渓谷の吟行会でお世話になった河鹿園に番傘が置かれていた。この日は曇りであったが作者はこの番傘を見て時雨心地になったという。番傘から時雨を想ったのは、河鹿園の大広間や各客室に展示の美事な文化財や美術品を心ゆくまで観た影響もあるのだろうが、「時雨心地の番傘」は玉堂翁ゆかりの地らしい、美しい言葉である。

遺影飾る花野の姉妹切り離し　原田ミチ子

遺影に相応しい写真を探していると、一枚のスナップ写真が出てきた。それは姉妹揃っての花野での写真。申し訳ないが泣く泣くこの二人を切り離し、片方を遺影として用いた。花野も切り離され寂しい限りだが、笑顔がとても美しく、この写真にしてよかった。そのような内容の句。切り離されても、二人はいつまでも一緒。

冬青草中州は鳥の象して　春田　千歳

冬なお青く、枯れ残っている草。冬草である。中州のその冬青草の群れが、作者には鳥のかたちをしているように見えた。緑色の大きな鳥だ。もの枯れる冬ざれのこの季節にこの中州の鳥は潤いを与えてくれたと、この句を読みたい。下五の「て」止め、この句では成功している。

猿の腰掛座れと言はんばかりかな　平野　美子

「座れと言はんばかりかな」から、かなり大きな幅広の猿茸を想像する。予約席のように作者を待ち受けていたかのようだ。「言はんばかりかな」の一瞬の把握がとても鮮やか。

鉄橋や紅葉の山の下つ腹　本多　遊子

紅葉山の裾野に鉄橋が見える。それを紅葉山の「下っ腹」と形容したのが上手い。ジオラマを見ているみたい。その鉄橋を電車が渡るとその先にはトンネルがあるだろう。下っ腹は福々しく堂々としていて、この山の紅葉が一層美しく読者の目にも映る。

日溜りに冬たんぽぽの負け嫌ひ　松本　直方

冬たんぽぽの必死に咲いている様子がこの句から窺える。たんぽぽは冬日のなけなしの光を一身に浴び健気。それをこの句では「冬たんぽぽの負け嫌ひ」と言っている。負けず嫌いのことだ。恐らく作者も負け嫌い。日溜りの冬たんぽぽと己とを重ね合わせての作かもしれない。暖かな春が待たれる。

八千草の自由たふとぶ子規の庭　持田きよえ

根岸の子規庵での作。子規は最後の十年間、身動きもあまり出来ず、叫ぶような闘病生活を余儀なくされた。その子規のため、子規庵の狭い庭には鶏頭をはじめ八千草が所狭しと咲く。「自由たふとぶ」は不自由に対する自由。庭の草花を絵に描き、歌に詠み、句に詠み、子規は命を全うした。植物たちの有るが儘の生を描くことで、子規もまた精神の自由を手にすることが出来たのだ。

推敲や殻の山なす落花生　森尻　禮子

自分の駄句を嘆く人がいるが、いきなり秀句が生まれるわけもなく、駄句を重ねていかねば先行き覚束無い。その駄句が、この句では「殻の山」として詠まれている。それが落花生の殻というのが傑作である。かの石田波郷も上五が決まらず何日も何日も推敲したという。そのくらい言葉は大切で、なおざりに出来ない。この句、「推敲や」に切実さ、真剣さを感ずる。

葡萄食ぶ尋ねそびれし師の一語　山田　径子

中村草田男の昭和二十二年作の句〈葡萄食ふ一語一語の如くにて〉に応える形で、草田男門の鍵和田釉子先生は〈師の一語一語や葡萄はひかりの粒〉の句を草田男の死後作られた。掲出の句の「師の一語」の「尋ねそびれし」はこのあたりのことを言っているのだろう。昭和五十八年八月五日に逝去した草田男の密葬の翌日、先生は

句仲間十人で府中市にある農業大学の農園を当初の予定通り吟行した。家から葡萄を幾房か持参し、その葡萄を皆で分け合って食べた時にふとこの句が浮かんだという。「悲嘆にくれてとても吟行どころではない気持ち」だったが「こういう時こそ句作に励むのが、亡き師への一番の恩返しのようにも思えた」と先生は幾つかの本に書いている。作者もまた若い頃からの釉子門。尋ねそびれたことが心に引っ掛かっている。草田男、釉子の「葡萄」と「一語」を用い、師の面影を偲んでいる一句。

どんぐりや一人に狭き切通し　山田　雅子

切通しには、鎌倉がそうだが、大きな切通しもあれば小さな切通しもある。小さな切通しは敵の侵入を防ぐために狭くしているそうだ。「一人に狭き」の通り。この句の「どんぐり」はその切通しの路に落ちている。それだけの句で、団栗を何かの象徴として使っているわけでもないが、でもこの団栗の存在は面白い。

長葱は緑の刀剣籠を出づ　横須賀智子

自転車の籠から飛び出ている長葱。それが「刀剣」に見えたというのだから相当に立派な長葱である。名付けて「緑の刀剣」。切り口の鋭い葱だろう。こんな所に目が行く届くのは、やはり好奇心が旺盛だから。

「閏句会」2月例会

2月19日（水）午後一時

会場　いずみホール会議室（西国分寺）

ＪＲ中央線「西国分寺」駅下車徒歩一分

◎会費　千円（当日承ります）

◎当季雑詠・四句（未発表句）

◎欠席投句する場合は開催日の五日前に発行所まで①句を書いた短冊、②四句と名前を書いた用紙、③返信封筒、④参加費千円を事前郵送すること。

◎一度投句した句の差し替え、訂正はできません。

◎問合せ先　守屋まで（０８０・６７７０・５４８５）

季語刻々　今昔

坪内稔典

天高し天（そら）の香具山かく低し　田中　京

句集「十一月の光」（ふらんす堂）から。香具山、耳成山、畝傍山、奈良県橿原市のこの三つの山は大和三山と呼ばれ、「万葉集」の歌などで知られる。香具山は三山のうちの2番目の高さで152㍍。現在、日本では大阪・天保山、仙台・日和山、徳島・弁天山が日本一の低さを競っているらしい。どの山も数㍍だ。

2024・9・26

（令和6年9月26日付「毎日新聞」より転載）

おいしい俳句

第1回　嵐山光三郎

五七五五七五と海苔を焼く　安西水丸

安西水丸と私は平凡社の同僚だったが、なにごとも五七五で描く才があった。南伸坊が編集長をしていた漫画雑誌「ガロ」に連載した『青の時代』がやたらと評判になったのは、幼くして父を亡くした少年の回想に俳句の息があったからだ。そのころ劇画というアクション漫画がはやり激写という写真も流行していたが、水丸が描くひとりぼっちの少年には孤独の恍惚があった。説明ではなく、俳句の目線があった。

一九八八年（四十六歳）二月、フジテレビの深夜番組「NY者（ニューヨーカー）」で、水丸と一緒にニューヨーク俳句吟行をした。私は、「ハドソンに女神飛び込む水の音」というふざけた句を詠み、水丸は「小雪舞うマンハッタンやハッカ菓子」の句を示した。水丸がメモをスケッチしている横で、私は「水丸は別名を青山雪舟という。雪舟はうますぎてマネできない。水丸はヘタすぎてマネできない。マネできないところが似ている。」とナレーションを入れた。水丸が、ますみ夫人と暮らしていた古アパートを訪ねた。そんな水丸は二〇一四年にヒュードロンと亡くなられた。

公益社団法人　俳人協会

おいしい俳句

第2回　嵐山光三郎

白葱のひかりの棒をいま刻む

黒田杏子（1938〜2023）は東京本郷生まれ。父は開業医。第一句集『木の椅子』に「白葱のひかりの棒をいま刻む」がある。よほど葱好きらしく、葱まるごと一本をかじってしまう勢い。

『黒田杏子歳時記』に「これ（葱）は光の棒だと思う。研ぎあげた刃がその光体を輪切に崩してゆくときのまないたのよろこぶ音。りんと立つ香気は真冬の宇宙の核心。」と書いている。タケノコ好きの深沢七郎さんは、竹の物干し竿を囓ってしまうため、竿のはじっこがボロボロに崩れていた。下仁田葱は、白根が太く甘い。大根の太股のようだ。杏子の師・山口青邨は「楚々として象牙のごとき葱を買ふ」と詠んだ。おかっぱ頭、モンペ姿がトレードマークでトコトコ歩き、俳句のパーティーでよく会った。モンペをはいた白雪姫は活動家で、金子兜太氏とタッグを組んで俳句講演会をして廻った。「季語の現場人」という姿勢をつぎ、博報堂に入社して雑誌「広告」の編集長をつとめた。瀬戸内寂聴さんなど著名作家と親交を持ち、京都寂庵で寂聴さんに句の手ほどきをした。いちじく好きで「いちじくを煮つめてをりて会ひたしや」「いちじくを割るむらさきの母を割る」。食べ物にまつわる句は心を揺さぶりますね。

公益社団法人　俳人協会